

## 乳幼児期の環境教育の研究

——スウェーデン型自然保育「ムッレ教育」をESD（持続可能性のある  
発展のための教育）の視点から分析する——

杉 山 浩 之\*

A Study on the Environmental Education for the Period of Infant Children:  
To Analyze the Nursery Nature Education in Sweden, "Mulle Education"  
from the Point of Education for the Sustainable Development

Hiroyuki SUGIYAMA\*

### はじめに

1957年にスウェーデンで始まった幼児のための環境教育（自然保育）は、野外生活推進協会が認定し推進するもので、法制度の下で認可されている保育である。1970年代半ばにその環境教育の方法が開発された。70年代は女性の社会進出が高まり、就業率60%に達し、主婦が主体であった森のムッレ教室は減少していった。野外生活推進協会は、一般保育園の活動としてムッレ教室を導入するように働きかけ、リーダー養成講座を提供していった結果、普及していったのである。保護者の要望に応え、クニユータナ（3～4歳児対象）・クノッペン教室（1～2歳児対象）も始まった。その後、学齢児童対象のストローバレ・フリールフサレ教室も開設された。1980年代になると、主婦から保育士なりムッレ教育を実践していたが、教育効果を考えて週一日から毎日型のムッレ教室を開こうと考え、1985年最初の野外のプレスクール、ムッレボーイ園が誕生した。2014年現在、野外プレスクールは約200園存在する。野外小学校は

同年、14校である。人口880万人内、40年間に200万人の子どもたちが幼児の環境教育である「ムッレ教育」を受けたということである。（日本の場合で考えると、2,500万人に子どもに相当する）この幼児の環境教育「ムッレ教育」は日本には、高見幸子氏によって1991年に兵庫県丹波市で初めて導入された。この保育の特徴は、地球の自然を保護する子どもたちを育てることである。1992年のリオ地球サミットで採択された「アジェンダ21」を引き継ぐ「持続可能な発展のための教育」（ESD）の保育版であるといってもよいであろう。乳児から小学生までの接続カリキュラム（図1）を持っている。年長児の保育を「ムッレ教室」と呼ぶ。ムッレ（mulle）とはスウェーデン語で「土」を意味している。

本研究では、ESDにおける「循環性」とそれを支える「多様性」という二点から、スウェーデン型自然保育（幼児の環境教育）「ムッレ教育」の日本における実践事例を分析し、成果と課題を明らかにする。

### I 理論的枠組み

スウェーデンには「自然享受権」が慣習法として長い間存在してきた。現在では自然保護法

\* 本学教授

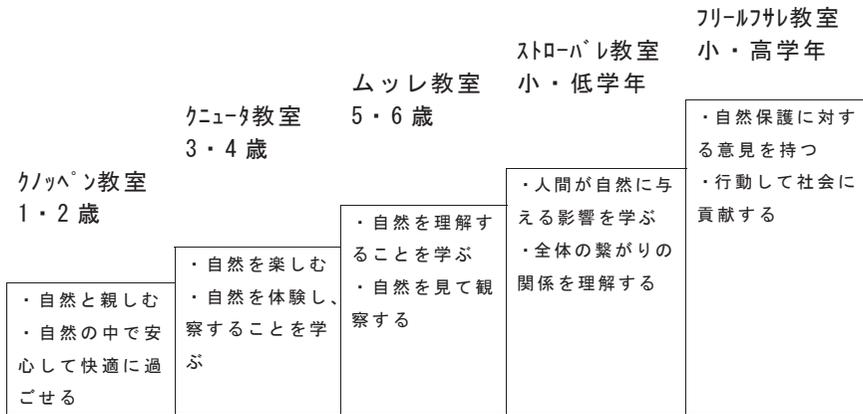


図1 発達段階に応じたプログラム（ねらい、森のムツレ教育、環境教育）（文献1）-3）より

の第1章に記載されている。自然享受権の前提にある三つの概念は以下の通りである。

- 1 人家に近づかない
- 2 土地所有者の経済的な関心に配慮する
- 3 ゴミを捨てない（騒音や他人が腹を立てるような態度を取らない）

自然享受権が認められる中で、許可されていることは以下の通りである。

- 1 野生の木の実やキノコを採集して良い
- 2 天然記念物になっている野生の花以外は積んでも良い。
- 3 宅地以外なら他人の土地を歩いても良い。
- 4 地面に落ちている枯れ枝や小枝は拾っても良い。
- 5 所有者の橋を使わなければ湖岸や海岸で泳いでも良い。

逆に、禁じられていることは以下の通りである。

- 1 自然にごみを捨てる。
- 2 低木や木の枝を折る。
- 3 小鳥の卵を取ったり巣を壊す。
- 4 他人の宅地を通る。
- 5 伐採された後おかれている薪を取る。
- 6 漁獲の許可書無く湖で魚釣りをする。
- 7 閉まっていた策の戸を開けたままにしておく。（注、「自然の中へ出かけよう」）

そして多くの家庭や園にはコンポストがおかれている。コンポストは、食生活のから出てくる自然物を循環により土に返す肥料を作るものである。土は植物や動物などの生命体に欠かせないものである。植物は土からの栄養で育ち、植物を食料にした動物は生を終えると土に還るのである。この考え方を子どもたちに五感を通して体験させ、知的な理解も同時にさせていくことで、自然環境の循環性を認識し、自然保護の重要性を知る。森のようちえんと比較すると、森のようちえんの場合は、園によって保育方針が多様であるが、一般的には森を中心とした大自然の中で大胆に遊びまわったり、植物を使用したごっこ遊びをしたり、子ども中心の自由遊びが中心であるのに対して、ムツレ教室の場合は、中心軸にESDの設定保育や環境構成があるが、それだけではなく、自由遊びの時間も保障されている。しかし、森のようちえん・ムツレ教育いずれの保育でも、プロジェクト的な遊びは可能であり、実施している。ムツレ教育も活動の仕方の工夫次第でプロジェクト型の遊びとして展開できるであろう。

地球環境の温暖化や環境汚染などを視野に入れると、ESDは今後の保幼小連携（接続）において展開していかなければならない保育である

と言える。スウェーデン型の幼児の環境教育は、その重要な使命を持っているとあって良いであろう。

さらにムッレ教育について、関連資料から特徴を以下の点から整理しておく（文献1）-3）より）。

- 1 「概念を築く」ということ。つまり「自然の中で研究したり調査したり実験したりすること」が「遊びや五感での体験」を補う方法となる。子どもたちは自然の中に生きている生物の「概念」を築き、広めることができる。例えば、可愛がっていた動物が亡くなったとすると土に埋めてやることで、やがて分解され土に還ることを知るのである。
- 2 太陽の傾きによって四季という季節が起こり、また太陽は水と空気の循環や植物の光合成を起こす「地球上の全生物のエンジン」であることを子どもたちは自然の中で学ぶ。動物の越冬（冬眠、食物の貯蔵、移動、毛の生え変わりなど）、植物の越冬（種、蕾、ロゼット、根、球根など）は重要な「概念」である。この概念の構築は動植物の多様な観察によって可能となる。栽培や飼育の重要性が分かる。
- 3 空気を体験する。空気の循環、空気の音、空気の匂い、空気の危険性、空気の重量なども「概念」である。風船、凧揚げ、種吹き、草木の揺れの観察、風車（かざぐるま）、などの様々な遊びがある。
- 4 水 の概念を体験的に理解する。雲や雨、そして川の生成、川は海に繋がること、地球上の水量は変わらないこと、100,000,000年前の恐竜と人間は同じ水を飲んでいて、地球の水のほとんどは海にあり動植物はそれを飲めないこと、それに対して真水は希少で殆どは南極と北極の水として保存されていること、スウェーデンには90,000個の湖があり水

が豊富な国であるということ、地下水の存在、人間による酸性水の発生と生物の死滅、空気と同様に、水の循環、水の音、水の匂い、水の危険性、水の重量なども「概念」である。水や雪、湯気も水が変化した物質として体験できる。海岸での砂遊び、ダム作り、水車遊び、自然物や笹船でのボートレースなどの遊びがある。また人間は3分の2が水分で構成され水なしでは3日しか生きられないことを知ることも重要である。

- 5 太陽のエネルギーを吸収して光合成をおこなう植物を食べる動物がいる。陸上動物は植物のお陰で酸素を吸って生きながらえる。二重に植物の恩恵に預かっているのである。人間もこのエコシステムの中に位置づいている。様々な分解者がいるお陰で循環が成立する。循環は普通目に見えないが機能不全な時に見えてくる。もちろん、ムッレ教室では行われるように植物の光合成や自然の循環の図を用いて概念作りが行われる。

- 6 「園のアジェンダ21プロジェクト」（注、「自然の中へ出かけよう」）それは日常のライフスタイルと消費のスタイルを変えるプロジェクトである。

- ・園が購入する物と出ていくゴミ、電気・水・紙・食料の消費など。
- ・Think Globally Act Locally
- ・環境マークのある製品
- ・オーガニック商標のある食品
- ・園内での栽培
- ・園内での動物飼育
- ・リサイクル
- ・節約（紙、プラスチック、アルミなど）
- ・生命の多様性を大切にする。

井上美智子氏は、『幼児の環境教育』（2012年）において、早くからESDに関わる視点をもって

ムツレ教育について注目している。

井上は、「多様性・循環性・有限性」を幼児の環境教育のねらいに入れるべきだと述べている。合わせて生態学概念の理解は小学校まで待つのではなく、幼児の段階でも可能であると述べる。

広島大学附属幼稚園（2016）では、2016年度からESDを研究の視点として森の中での自然保育を分析しようとしている。その研究枠組におけるESDの柱は「循環性」と「多様性」である。

これらのことから、「多様性」と「循環性」（関係性、繋がり）の二つの視点をもって、以下の事例研究の分析の視点をしていく。なぜなら、この二点がムツレ教育との共通点であるからである。

## II 事例研究

### (1) 「森のムツレ全国シンポジウム」(2016年10

月29～30日開催、関市)における討議・実践内容

1) 安曇野NPO法人・くじら雲(代表、依田敬子)長野県安曇野市にある森のようちえん「くじら雲」で、万歩計による測定を実施したところ、5時間保育で平均約8,000歩であった。一般の保育園では8時間で5,000歩というデータがあるようだ。骨密度の測定では約2倍であった。子どもは出来ないと思って過保護な保育があったり、目的地まで手をつないで歩き、歩く途中の自然から学びことはしない保育があったりする。くじら雲では、2キロを3時間かけて歩いていく。ちなみに、安曇野市では、森のようちえん(無認可)に対して、今年から、一人当たり月9,656円の補助が出ている。保育料は、36,000円であり、この予算で保育を展開している。数年前は森でクマが出たらどうするんだと議論が議会の中

でも行われるレベルであったが、信州型自然保育認定制度が始まると市長も変わった。

ムツレ教育に関して、子どもたちは葉っぱが何のためにあるのかを知っており、クロロフィルが光で木のための栄養を作ることを理解し、紅葉すればクロロフィルさんがいないねーと呟いている。

2) 浜松市・森のムツレリーダー(県環境学習指導員)が都市型のムツレ教室を展開している。浜北区森林公園・森の家、3～6歳の親子(10組)、土曜日10時～12時。年5回。一人500円。雨具持参。ムツレのパネルシアター(花の匂い、木の根っこ、動物のイラスト、アリの行列、ムツレの手紙、葉っぱを触ってみる)をはじめ、聴診器で木とおしゃべりしよう、ムツレの手紙「来てくれてありがとう」、繋がりを発見しよう(古民家で、ねじりパン)などを展開している。

3) 長良川自然学校では、四つの活動(水田クラブ、川の学校、海の学校、どろんこクラブ)を行っている。

4) 福岡環境ネットワーク「虹」(代表、佐伯美保)では、シマミミズから循環の仕組みを学び、生き物への配慮を学んでいる。アカウミガメやカブトガニに触れること、マッチ三本で火を炊くこと、無農薬のコメ作り、リーダー養成講座とステップアップ講座を展開している。教えすぎ・援助しすぎはダメである。ムツレ5・6歳(15人)、ストローバレ(小学生19人)、クリュータナ(3・4歳)6世帯、クノッペン(9世帯)、親子広場32世帯、福岡教育大付属幼(58人)など参加実績がある。概念作りは身体全体で感じる。森の教室では、木が大きくなるために必要なこと、循環の仕組み、自分たちとのつながりを学ぶ。生き物のお家は川や野原ということ。「森の

ムッレだより」(4月)では動物を見つける一歳児。森のオープンスクールでは、葉っぱと蝶のつながり(植物と動物)を学び、石川県のアサギマダラがやってきたことを知る。年間を通してのテーマ学習「虫」(プロジェクト保育)を展開している。怪我にも免疫が付いてきた保護者が徐々に増える。虫を触った手で水筒を飲むことに抵抗があったが、徐々に消えていった。「ふくおか子ども白書」を発行したり、古賀市子ども劇場を推進している。子どもたちは、自然感覚を磨き、自然の循環の根源である植物(土、水)を学んでいる。

5) 桜花学園大学(嶋守ゼミ)手遊び、ムッレの説明、ムッレの歌、動物なりきり遊び、ムッレとおやつ、ムッレの手紙、ムッレのプレゼント探しなど活動している。

6) 森のムッレ教室(9:00~14:00)

- ① 全体オリエンテーション
- ② 森へ入り、スタッフの自己紹介、子どもたち14人の自己紹介。
- ③ 森の探険にいこう!ゲーム「森探険にいこうよ」(猛獣狩りの歌の替え歌)  
「虫さんたちもお友だち、リュックだって持ってるもん、水筒だって持ってるもん、あ、あ、あ、ハチ」  
二人組になって「好きな食べ物を聞こう」  
3人組「朝何を食べてきたいかな」
- ④ 森のムッレさんに会いに行くよ(会いに行くための歌を歌うよ)「僕は森のムッレだよ!」歌・注意すること・ムッレさんのお話(パネルシアター、参加型)・ビンゴゲーム・黄色の葉っぱを集めよう。
- ⑤ 森へ入っていきこう、歌う。
- ⑥ ムッレの登場、友だちも登場、メッセージ「自然と仲良く」、  
\* クノッペン(手を繋いで丸くなり、ハ

チが刺すゲーム)、電車ごっこ、

\* ムッレの小屋を作る、丸太、屋根

以上のように、ムッレ教室では、「森で仲良く、楽しく活動し、森を好きになること、森のエチケットを学ぶこと、そして森を保存するために政治的行動ができる大人に」ということが目指されているということである。

スウェーデンでは、森での保育の場合も、園舎が必要で、カリキュラムが大切である。今の認可園は約200ほどである。その数字は世代交代もあって、昔に比べてやや減っている。貧しい時代に生きていくための知恵として健康が大切だと認識した。そのための豊かな自然環境は不可欠であるということが認識され、野外生活推進協会が中心となって「ムッレ教育」を推進してきたのである。その勢いは、北欧。イギリス、そしてアジアの日本へと広がった。特に、隣国であるフィンランドでは、スウェーデン以上の園の数に増え、盛んに行われているということである。

(2) 2016年11月20日 10:00~12:00 福岡県・福津市「竹尾緑地」でのムッレ教室視察

リーダー(スタッフ)、佐伯美保先生(環境ネットワーク「虹」代表)および上野

1) 「竹尾緑地」の概要

市の施設(5,000 m<sup>2</sup>)である自然のビオトープでは、ニホンアカガエル(卵から250匹以上がいることが分かっている)、カスミサンショウウオもいる。森の中には野ウサギなどもいる。人口ビオトープもある。

\*「わかたけ広場」も活動場所としている。そこにはキャンプ場があり、火が使えるので、ねじりパンや料理をすることができる。渡りのアサギマダラが10月に飛来してくる。木の箸

を作ることもある。

竹尾緑地

2) ムツレ教室 (10:20~11:30)

15人登録であるが、本日の参加は9名(男子8人、女子1人)。幼稚園通いの子が多い。発達障害児1名。スタッフ2名(佐伯さんと上野さん)上野さんは、昨年までIT企業(京都)にいた。今年からは障害児の学童保育を主にしているが、ここにもリーダーとして参加している。

全員が揃い、今日のリーダー紹介。子どもたちも自己紹介する。リーダーがムツレのパペットで、森へ入るときの三つの約束を尋ねると子どもがすぐに応える。

「草木を根っこから抜かない。ごみを捨てない。大きな声を出さない。」

- ① ムツレの歌を歌う。
- ② スタッフが今日の予定を話す。「落ちている葉っぱを拾いながら森へ入っていきます。自由に捨ててください。」(スタッフからビニール袋が配付される。)
- ③ 一列に並んでいこう。しっかりと守って歩いていく。
- ④ 歩き出して子どもがすぐに虫を発見。「カキがなっている。」「バッタ!」と次々に子どもが発見して話すと、リーダーが一つ一つ発見を共有できるようにみんなに見えるように援助して確認していく。リーダーが発見したものを紹介することもある。この日は、ウバユリを教えて、「春に花が咲いていたけど」と今の姿を見せ、「今度、春になったらどうなるかな」と子どもに声掛けする。「これは何の穴かな」とも声掛けする。
- ⑤ 山道に入るときも一列を守って、細い道を上がっていく。ぶつかって少し押す場面もある。リーダーが「押さないでねと」やさしく言っている。

⑥ 男児一人が木の棒をもって植物などを叩いている。発達障害児である。継続参加する過程で徐々に集団に入ったり落ち着いているとのことである。「棒を振り回さないでね」「草がかわいそうだよ」など声掛けをする。

⑦ 「へんなキノコ!」と子どもが発見する。リーダーが直ぐに「どこ?」と応える。キノコについて説明し、「みんなよく見てね」と声掛けする。

⑧ 森の中の広場(秘密基地のツリーハウスが数個ある)に到着。「俺はお家に入るぞ」「これは俺のお家だ」と一人の男児が大きな声で言う。数人が入るが直ぐに出る。

⑨ ドングリを見つけて、子どもが「スダジイ」と言う。遊びの中で結果としてドングリの種類や名前を知っている。(子どもがドングリや植物など名前を知ることとは目的ではなく教える意図もない。自然を知ったり親しんだりするための遊びの結果であると佐伯先生から聞き取る。子どもたちも名前を知りたいというときは教えているし、子どもが自宅の図鑑で調べて名前を覚えることもある。)

⑩ 15分ほど観察しながら移動する。移動中、ゴミを子どもが見つけてリーダーに見せると「土に戻らないゴミだから、持って帰るね」とリーダーが応える。広場に戻ってくると、布を広げて拾ったものを出そうと声掛けするが、子どもは全部は出さない。自分のものにしたいからという意思表示に見える。葉っぱやどんぐりなどが並べられる。リーダーは同じ葉っぱを集めていく。子どもたちは見ている。「これはスダジイだね」と子どもがいうと、リーダーが「大きいドングリは?」と尋ねる。「マテバシイ」と子どもが応える。リーダーが「これは何の実かな」と尋ねると「すぎ」と応える。リーダーが葉っぱの変化について話題

にする。「緑の葉っぱは木に付いているとき大事なお仕事をしているよ。何をしているのかな」と言うと、「日影を作る」と応える。

- ⑪ 教材「葉っぱの台所で空気が生まれる絵」を見せて説明する。「葉っぱは、この後どうなるかな」と尋ねると子どもは「土に戻る」と応えて、リーダーが「木が土から葉っぱの養分を吸い上げて実を作る力になるね」と加える。リーダーが「葉っぱを触ってみて」と声掛けすると、子どもは手のひらに葉っぱを乗せて感触を確かめている。「手の大ききさくらいね」とリーダー。取り合いになりそうなので、リーダーが「順番よ」と声掛けする。
- ⑫ リーダー「色んな葉っぱがあったね」。白い布袋を取り出し、「袋の中のものを手で触って、同じものを探して来よう」とリーダー。（中には、木の枝、どんぐり、葉っぱ）
- ⑬ リーダー「今日は、キノコもあったね。森の中で大事な仕事をしていたね。」子どもが「腐った木を土に戻す」というと、リーダーが取り上げたキノコを子どもが触り「グミみたい」「わらかいね」と言い交わす。リーダーが「このキノコは何に見えるかな」というと、子どもが「栗の実」と応える。リーダーが「そうだね。だから、ツチグリって言うんだよ」と応える。
- ⑭ 一人ひとりにルーペを渡す。「自分で見つけたもので見たいものを見ようね」子どもたちは早速、見つけたもの以外も見ようとしている。木の幹にルーペを当てたり、赤い実を見たり。たまたま、ガガンボの交尾を子どもが見つけ、リーダーが子どもたちを集める。木の幹をルーペで見ていた子どもは「ばい菌がいっぱい」という。
- ⑮ リーダーが葉っぱの教材を見せる。葉っぱを虫が食べて土に戻してくれる絵を説明して、

「キノコも木と同じことをしていたね」と付け加える。森の中に赤い実があったが、「南天に似ているけど、今あるのは、ヤブコウジと言います」と伝える。

- ⑯ 初めの集合場所へ戻っていく。ほとんどの男児は走っていき、保護者の方へ行く。

終了後に、佐伯先生が次のことを話してくれる。

- ・〇〇くんは発達障害で、いつも棒を持って遊んでいるけど、少しずつ良くなっている。
  - ・今日は全体的にテンションが高かった。何が作用したのかはわからないが。（見学者の影響かもしれない）
  - ・〇〇くんは、久しぶりに来た子である。（ドングリを巡って、誰のものかを争うトラブルが途中であったが、久しぶりだったので、かたくなになったのかもしれない）
- 以上のように、ムッレ教室が展開している。

### (3) 2017.2.16 森のムッレ園ぼっぼの視察

上の2つの実践を視察したが、毎日型の園ではまだ見たことがないので、毎日型のムッレ教育をどのように実践しているのかを視察する必要がある。環境教育を推進する保育は時代に必要なものであるが、設定型が多すぎると子どもの自由で主体的な遊びを抑える傾向が生まれ、チャレンジしたり、助け合ったりする活動が減り、遊びの多様性が失われる。さらに創造性を育てるチャンスが少なくなる。こうした問題意識から、週3日であるが、日常保育を展開する、雲仙市にある森のムッレ園ぼっぼを視察した。

まず、事前のアンケート用紙に対する回答は以下のものであった。

- 1 「ムッレ教室」いわゆるスウェーデン導入の環境教育を導入してからの保育活動

- ・幼稚園教諭を親の介護のために退職してからムッレ教育に出会い、始めた。
  - ・日案、週案、月案がある。現在は火水木の三か日間、29年度より週五日。
  - ・0歳から6歳までの保育をしている。0歳から始めたのは、国内で初めて。
  - ・ただの自然体験をしていることはもったいない保育であると思う。
  - ・月一回の調理活動。リーダーである桑田久美子さんの家の無農薬野菜を使用している。
- 2 現スタッフの紹介 二人（桑田さんと元保護者）
- 3 環境づくり（園庭、屋内、地域資源の活用と連携）
- ・現在の遊び場は、基本的には公園を利用している。その中で一つ拠点を決めて、移動もする。
  - ・過去の遊び場として、小川のある溪谷もある。

「視察記録」

9:00 子ども4人が自由遊びをしている。動物の滑り台を作るというR君（4歳）。

たき火ごっこをする（Aちゃん4歳、Yちゃん4歳、K君2歳、R君）

アイスクリーム屋さんごっこ（3人）K君だけ朝の会に参加。

KW（桑田）先生は、計三回、三人の子どもたちに「朝の会が始まりますよー」と声をかけたが、気にしつつも集まろうとしなかった。あとでKW先生から「どうして来なかったのか」を尋ねられ、「大人の言うことが聞けない人は山へ連れていけないので、ここで遊んでいなさい」と言われて反省する。

朝の会

たきびの歌。K君の要望で「うぐいす」

「はっば」を歌う。K君は「みんな遊んでる」と気にして声に出す。グロッケン（鉄琴）の伴奏。「真っ赤な秋」。「クノッペンの歌」（カタツムリが登場）「クニュータナの歌」（テントウムシが登場）

出席者の呼び出し。「Kです」「2歳で一す」「K君、もうすぐ何歳ですか」「3歳で一す」（指で表す）

「今日は、絵本を読んだら、トイレに行ってから、山に行きますよ」（3人はまだ遊んでいる）

KW「手遊び、何がいいかな」K君「でんでらりゅう」がいい」「どろぼうに、ばーんばーん」

絵本読み聞かせ「今日の散歩は雪そら歩き」（K君は絵を見てお話をする）

K君「みんな遊んでる」。絵本の途中でK君の集中が切れる。（3人ことが気になるのか？）（たき火の木を指さして）K君「何を燃やすの？」KW「木だよ」K君「みんな遊んでるよ」KW「K君は偉いね」

KW先生がK君の椅子の向きを変えて絵本に集中するようにする。その後、絵本に集中する。

KW「おしっこしてリュックを持ってきてください。お弁当はここで食べるよ。今日は木の芽を探しに行くよ」

KW先生、3人のところへ行く。「楽しかった？ 今日はどうぐり山に行くけど、どうする？ 朝の会するよと言ったのに、聞こえなかった？ 3、4回は言ったよ。どうして来なかったの？」（3人とも、反省している顔つき）

一人ひとりに理由を尋ねていく。どの子ども「おもしろかったから」と応える。

KW「何してたの？」子どもたち「おみせ

やさん。アイスクリームやさん」

KW「私たちの方、見ていたね。どうして？」子どもたち「上手だなんて見てた」

KW「読んででも聞けない人は連れて行かないよ」（声は出さないが泣き出すAちゃん）

KW「どうする？ここで遊んでいてもいいよ」「いや」（Aちゃん）

KW「もう少し待ってて、とか言えたら良かったね」

KW「朝の会、出なかったから、今日、何するのか、分からないよ。2歳のK君が聞こえて、3歳なのに聞こえないの？ここで遊んでおく？」「いや」

KW「付いて来たいなら。大人の話聞いてね」「うん」

KW「言葉で、ちゃんと教えてください。2分で準備して。」（3人は急いで準備を始める）

先に準備ができたK君は昨日の焚火ごっこの続きをする。マッチを擦るしぐさ。「火付いたかな」

（今日は、お客がいて、怒られないという知恵が働いたのではないか。こういうことは初めてであった。家ではお役さんが来るときは起こられないので、ここでもそうだと思ったのであろう。いつもなら、さっとくる。以上、桑田先生の推測である）

R君がK君に「ごめんね」と言いに来る。「ここでいいよ」とK君。R君はすぐに2人のところへ行く。「良いよって」と聞こえる。2分が5分ぐらいになるが、出発の準備ができる。

出発

KW「今日は何をしますか」子どもたち「ドングリ山で遊ぶ」（「くまさんとかんかんごっこ」K君）

KW「木の芽を探そうね」子どもたち「はーい」、みんなで揃って「レッツラゴー！」

森の入り口

KW「こんにちは、森さん。入っていいですか？聞いてみよう。」

子どもたちは、地面の上に横にある竹に耳を当てて、「いいって」という。

KW「3つの約束は何ですか？」

KW「一つ目は？」子どもたち「ごみを捨てません」

KW「どうして」子どもたち「ウサギが食べたら死んじゃう」「見つけたら拾う」

KW「2つ目は？」子どもたち「草花を根っこから取りません」「ちょうちよさんが食べるものがなくなる」

KW「3つめは？」子ども対「大きな声を出しません」「鳥やカラ明日がびっくりする」「赤ちゃんがいる」

KW「今日は、草の芽、木の芽、花の芽を見つけていこうね。宝物も見つけたら拾うね。」

ムツレ（人形）登場

木の芽などを観察したあと、人形のムツレを子どもが見つかる。KW先生がムツレ役になり、子どもたちに話をする。ムツレさんはお掃除をしていること。みんな、お約束をよく聞いていること。ムツレさんは他のところをお掃除しに行くこと。そして、バイバイをして別れる。

発見と言語表現

木をお願いをして、木の芽をちょっとだけ取らせてもらう。

花の種を飛ばして遊ぶ（タンポポに似た植物）

Yちゃん「大きな花を咲かせてねー」先生

たち歓声。

木の芽を観察して森の奥へと進んでいく。子どもたちは発見したことを言葉で表現している。

ごっこ

途中で、ごっこ遊びが始める。K君が好きな「電車ごっこ」（朝登園する前に電車を見てくることがある。保護者はわざわざ遠回りしてくる。マイペースでこだわりの強いK君であるが、受け入れられている。一つ一つの活動に時間がかかるので、保護者は時間を前もって考えてK君と関わっている。一般の園では難しいのかもしれない。こだわりの強いので、発達障害かもしれないと医者と言う。保護者はそれも受け入れるゆとりがある。以上、桑田さんから聴取。）K君は「かんかん」と踏切を下ろす係。「切符をください」と言い、受け取ると、踏切を挙げて人を通らせる。

別の場所では子どもたちが関所を設けて、「ドングリ山へ行く人はお金をくださーい」という。金額はいろいろだが、思い付きで金額を言っている。大人は葉っぱや石や枝で払っていく。行き帰りで5回程度行われた。

クイズ

途中でKW先生が「クイズをするよ」と言い、ユキノシタの葉っぱを観察させ、触らせて、これと同じ葉っぱを探してくるように指示する。「よく見て」「触ってみて」子どもは「つるつる」「さらさら」と感触を確かめている。一人ひとりに触らせる。Aちゃんが「かたんやし」という。みんな取ってくる。

KW「みんな正解」〈拍手〉KW「ユキノシタという葉っぱだよ」

KW「今度は難しいよ」同じようにして探してくる。

KW「ふゆいちごの葉っぱだよ。前に食べ

たね。」

再出発「レッツラゴー！」

KW「触ったらいけない葉っぱがあるから、気を付けてね」

K君「〇〇の葉っぱがない」（前に遊んだ時の葉っぱを思い出しているとのこと）

ドングリ山に到着。10:50

子どもたちはなだらかな原っぱの斜面をゴロゴロと転がる遊びをする。どの子も5回以上する。その次は、走り下る遊びをする。五回ぐらい。Aちゃん「面白くて止められない」Aちゃんは入園して1か月余りであるが、脚力が急激に伸びている。入園当初は、子どもたちに付いていくのも大変だった。K君が「タバコが落ちていた」と拾って先生に渡しに来る。

（この段階で、この園でのムッレ教育は、自由遊びとムッレの環境教育を組み合わせていることが分かった。）

雲がきれいなので、みなで鑑賞する。WK先生が声をかける。

WK先生と一対一で「どんぶらこ！」と地面に腰を下ろして舟遊びをする。2人。

WK先生「ぼっぼに帰っていいかな」Aちゃん、R君「いやだー」。Aちゃんもお船をしようとWK先生が声をかけて満足して帰ることになる。

11時20分、到着。ほとんど観察はしないで帰る。

一度だけ関所でお金を払うごっこがある。ご飯の支度（薪に火をつけたり、いすを並べたり、子どもたちは、手を洗ったり、お弁当を持って来たり）そろっていただきますをする。早めなせい時間がかかる。昼食が終わると、お昼寝の準備を先生がする。

クラフトセンターで二人のリーダーが寝袋をしく。子守唄を歌う。昼寝の間、私を入れ

て反省会をする。

#### 反省会記録の要約

活動日の火・水・木曜日以外の月・金曜日は子育て支援センターに、4人の子どもは親子で来ている。

K君は、こだわりがとても強く、観察力や表現力が豊かな子どもである。

来年度から五日制にするが、そこでは劇づくりをしたい。

課題は、送迎バスがほしいこと。園児獲得のため。自宅の農場に園舎を立てたいこと。二頭のヤギと鶏をすでに飼っている。野菜は無農薬で栽培している。

#### 翌日にいただいたメール

昨日は、遠くから来てくださりありがとうございました。アンケートと論文ありがとうございます。勉強になります。ムッレ園と比較ができたらほんとうにおもしろい結果が出てくると思います。4月から週5日になりますので、比較ができたらいいですね。興味あります。ご指導ください。それから、昨日の出来事の振り返りをしました。子どもは、日常の中で、知らない人が来たというのは、日常ではないので緊張していつものしなやかさを失ってしまう。気持ちがふわふわしてくる。いつもできることができなくても当たり前だったのではないかと。先生が来たことで緊張していたのは、私たち保育者だったのではないかと考えました。そう考えると、「なぜ、いつもできるのにしないの？」という気持ちから怒りがでてきたのかもしれない。そこを園児たちが感じ取ってしまったのかもしれないね（笑）そうやって分析していくと、保育者が、見学者が来たときにいつものようにできなくてもOK！という平常心を保育士が持つことが大切だったんだと反省しました。昨日ので

きごとは、これから見学者が増えていくであろう未来のことを考えると、保育者として振り返るいい機会を下さったことに感謝申し上げます。今、保育園の保育士、保護者とともに心理学を取り入れた子どもとの関わり方を始めようとしていた矢先でしたので、本当に反省させられました。いい機会をありがとうございました。是非、森のムッレ園という名前を使用して、野外保育園を作ってください。そして、ムッレを全国に一緒に広めていく活動をしてください。よろしくお願いします。また、お会いできることを楽しみにしています。

（桑田）田さん（上のメールへの返信）

筆者 メールをありがとうございました。

いろんな野外保育の園をいつも見学させていただくとき、子どもとの距離には気を遣います。全く関わってはいけな、遠くから観察してくださいという園もあります。今回は、自然に振る舞い、一スタッフ（見守るスタイル）のような感じで見学させていただきました。当然、良かれ悪しかれ、子どもたちへの影響が出ます。スタッフにも影響はありますよね。でも、今回はこのように親しくさせていただき、大変に感謝しております。ポッポさんに保育は素敵だと思います。お世辞ではありません。少人数だからできるという面もありますが、先生方の力量で子どもたちの育ちが見えました。繰り返しますが、見守るスタイルではなく、もっと専門性で関わる保育が良いと思いました。ポッポのように。やはり、野外保育が良いです。その思いを強く確認する見学ともなりました。3人の行動は、結果的に子どもたちを一段と成長させる節目となると私には非常にうれしいことです。桑田先生の関わりによって子どもたちはきっとそうなるだろうと信じています。添付ファイルに資料を付けました。ご覧ください。比較アン

ケート調査のことは私の方でも考えてみたいと思います。では、またお目にかかりましょう。

- (4) 秩父・花の森こども園（本園は、ムッレ園ではないが、園代表の葎田あきこ氏はムッレ教育について理解があり、保育の中で環境教育を意識しているので、視察記録を取り上げた。（参考、葎田あきこ著「ようちえん、はじめました」新評論、2017年。）

2017.2.23 秩父 花の森こども園（木育認定、埼玉県）の視察

本年度10年となる。今年は年長が多く、22名中11名。昨年は1名が年長であった。

9:30 登園後、自由遊びをしている。園舎内では、年長児の五七五の俳句をひらがなで子どもが書いた作品を読む子もいる。連絡帳を出すテーブルには、カレンダーがあり、フェルトで制作した数字を付ける。習字「あそぼ」、等身大の自分の造形作品、松ぼっくりのひな人形など作品が棚・窓などにある。砂場での泥団子作り。ブランコ。生き物がかりのヤギ小屋掃除（糞と糞）。

（自由遊びの時間と環境は重要であると感じる。ムッレ園の環境教育と自由遊びの両方の時間があることと同様である。）

10:30 朝の会

子どもたちが持参した野菜などの紹介。生産地を地図上で示す。（外国もあったが、子どもたちの記憶と集中を考えると絞る必要があった。遠くから来ることの意味。近くで採れるものの良さ）お客（自分）への自己紹介は、一人ひとりが名前を言い、「よろしく願いします」を付けて話せることに驚く。このような自己紹介を全員から一人ひとりから受けることは初めて。今日の当番の紹介。（テ-

ブルを拭く、米を研ぐなど）2～3月は、卒園メニューで、年長児の希望でメニューが決まる。

（環境教育の一場面があった。工夫が必要だった。旬の野菜の栄養や味。フード・マイレージなど。自分の名前をはっきりと言え、あいさつできることは人として重要なことで人としての基本的な教育が出来ている園である。）

11:00 調理準備始まる

「手伝う」ではなく、調理は大人と子どもともに自分たちの食事を自分で作るということが共通理解としてあるが、遊びに夢中な子どもは、そこは緩やかにしている。半分程度は大人の指示を受けて野菜を洗ったり、切ったりする。すでに整えられた薪に補助されてマッチで火を付ける。「働かざる者、食うべからずだよ」というスタッフの声も上がる。すぐに気持ちを入れ替える子どもたちではないようである。毎週の「同じ釜の飯の日」であるから、人数的に余裕があると感じているのであろう。調理場も22人が入るには狭い。調理に興味ある子が集まっているのであろう。保護者ボランティアも参加している。調理に参加する子どもは一生懸命に活動する。

13:00 配膳の始まりの合図（園舎入口の木の板を叩く音、木育認定園らしさ）

子どもたちが集まってくる。スタッフの声掛けにより、さらに集まる。

13:20 いただきますの感謝の言葉を一齐に唱和する。

「大地が食べ物を作ってくれました。お日様は……。お父さんお母さん……」

食事後は食器の洗浄など片付け。終わり次第、自由遊び。

帰りの会の始まりの合図とともに遊び場の片づけを急いでする子ども立ち。（声掛けあ

り)  
(感謝の言葉に感動する。とても重要なことである。環境教育の視点からも。)

14:30 帰りの会 (スタッフ司会)

明日の予定、アミューズパークで集合の確認。今日の当番と明日の当番の確認。

卒園まで16日というカウントダウンが確認される。絵本「大きな木がほしい」

#### (5) 丹波市市島町認定こども園

市島町は、スウェーデン型の幼児の環境教育が日本で最初に導入された土地である。それは、高見幸子・豊氏が中心となり、日本野外生活推進協会を設立し、お二人御兄妹の生まれ故郷で、スウェーデンと比較した自然環境の劣化を心配し、自然環境の保全を担う日本の国民を育てたいという志であった。

今回は、そのムッレ教育を引き継いでいる2つの認定こども園を視察した。

視察日 3月8日(水曜日) 晴れ

社会福祉法人市島福祉認定こども園いちじまこども園 (丹波市市島町上垣138-1)

10:00 園庭で集合。

- ・ムッレの歌を歌う。子どもたちは「しぜん図鑑」を首に掛けている。
- リーダー (保育者) 2名、年中児17人。

10:05 出発。途中の様子。

- ・土手でタンポポなど草花を見つけ、「図鑑」で確かめたりする。
- ・保育者「ひろき君は約束を覚えているね。『ゴミ』は持って帰るんだね」と言っているのが聞こえる。子どもから「ゴミ」を拾ったと保育者に伝えてきた。
- ・保育者「草花は『むやみに取らない』という約束だね」と声掛けする。

・保育者は子どもたちを集め、「これ、なんだっけ?」と聞くと、子どもが「ひめおどりこそう」と応える。

・子どもが卵の殻を見つけて保育者に見せると、保育者は「これは『土に還るかな?』」と尋ねると、子どもは「戻る」と応える。

じゃあ、「おいといてね」と保育者。

・子ども「タバコの吸殻」と持ってくる。保育者、「それは持って帰ろうね。」

・保育者「二人組になって行くよ」

・保育者「森の中に行くよ」。子ども「行きたーい」

・子どもがタコ糸のゴミを拾い、帰るまでずっと持って、二人で持って帰る。

・民家の近くで、「この木知ってる?」と保育者が尋ねると「梅」と子ども。

#### 筆者考察

以上のように、子どもと保育者は応答的にかわり、保育者から指示や質問が出される。

次の森の入り口で森など自然の中での過ごし方の約束を確認するが、子どもたちは、環境保護の行動が身につけているので上記のような言動が見られる。

10:20 森の入り口に着く。保育者「ムッレさんの約束を思い出そうね」。

(子どもたちと応答的に確認する)

- 1 多くな声はダメ。鳥たちがびっくりして逃げていくから。
  - 2 草花を根っこから抜かない。そこから芽が出たり、花が咲かなくなるから。
  - 3 ゴミがあったら拾う。動物たちが食べたら身体を壊したり、死んだりするから。
- ・保育者「もうすぐ春だね。森はどんなかな?」

- ・子ども「からすのえんどう、あるかな？」
- ・保育者「春にあったね」
- ・保育者「耳を澄ませてみて」
- ・子ども「からすが鳴いている」
- ・保育者「あじさい、前と変わってるね」
- ・子ども「(図鑑を見て)、芽が載ってるよ」
- ・分かれ道に来る。子どもにどっちへ行きたいと聞いて、多かった方に向かう。
- ・保育者「森の中、あったかい？ちょっと寒いね」
- ・子ども「コリコック！」(数人) 保育者の掛け声で一斉に「コリコック！」
- ・保育者が、人形を出す。
- ・ムッレ(保育者)「今日、何を見つけたの？」
- ・子ども「ひめおどりこそう、たんぼぼ」
- ・ムッレ「春になったら、もっといっぱい見つけてね。ムッレさんと一緒に森の中へ行ってみよう」
- ・子どもたち「コリコック！」と何回か呼んでみる。  
(秋のプログラム・ファイナルでムッレに出会ったのでそれを覚えていて、呼んでいるとのこと)
- ・保育者「大きなムッレさんがまた来るかもしれないね」

分かる。

- 10:30 ムッレ小屋のある拠点に到着。秋にファイナルパーティーの場所。ねじりパンを焼く場所もある。シタケが原木から生えている。
- ・保育者の指示に従い、子どもたちは図鑑を肩から外す(筆者にとってほしいという子が二人寄ってくるので、とってあげる)
  - ・保育者が「集まって」と声をかけ、「あと10秒」といい、カウントダウンすると走ってくる。
  - ・保育者「ゲームをするから、水筒を木下においてください。自分の木を決めてください」(全員が決まった様子を確認してから)
  - ・保育者「木におはようと言って、ごあいさつしてください」
  - ・保育者「木を変えろうと言ったら、水筒のある友だちの木を見つけるんだよ。できるかな」
  - ・ゲームを6回ほど行う。
  - ・保育者「じゃあ最後するよ」終わると「え、もう帰るの」「いや」という子もいた。
  - ・保育者「木にありがとう」と言おうね。子ども「ありがとう」
  - ・保育者の前に立って、集合するとき、一番がいいと衝突して、泣く子が出る。

#### 筆者考察

子どもたちは環境保護の約束を思い出して言語表現している。保育者は冬から春への自然の変化に子どもが気付くように誘導している。子どもたちは目の様子を思い出しながら、図鑑で確認するなどして自然の変化に気づいていく。妖精ムッレに出会ったこともあるので、再びムッレに合えるかと呼んでいる。4歳から5歳の子どもたちが妖精を身近に関していることが

#### 筆者考察

本日は時間がやや少ないということで、設定保育(ゲーム遊び)となった。

まだ森の中は気温が低く、自由遊びには向いていなかった。ゲーム遊びの中でも、自然との触合いや自然への感謝の心の育ちを援助している。

10:50 森の外に出る。日が当たって温かい場所

に出る。寝そべる子ども。

・保育者「お茶休憩しよう」

11:10 園に到着。帰りもほぼ同じように、ゴミ拾いとタンポポなどの花を摘む。

以下は、園長先生へのインタビューの要約である。

今日のプログラムは、約1時間であったが、普段は90分くらいとのこと。自然の中に出かけて本来の目的を達成しようとするれば、保育者の数が二倍必要ということ園長先生から伺った。本時は、子ども8～9人に1人の保育者の割合である。保育士が不足しており、必要な保育士が雇用出来ていないとのこと。

取拾した草花はよく標本にする。白い布の上で分類する。ルーペで観察をする。などの活動によって観察をしている。

最近は、子どもが変わってきて、おむつが取れない、お箸が持てない、身支度ができない子どもが増えている。そのために、ムツレの年齢でもクニユータナレベルの保育が続くこともある。

1年間、春と秋と早春で18回、計16時間×3回、シーズンごとに週1回では少ないのではないかと。子どもが変わった今はなおさらではないか。2倍くらいに増やさないと子どもの力として定着しないのではないかと。という質問に対して。

確かにそういう面はあるかもしれないが、他の保育もしないといけない。平成4年よりプロジェクト型保育を展開している。幼稚園から認定こども園に変わるときに反対があって、幼稚園の教育は続けるということで認められた経緯がある。食育プロジェクトでは「レストランに行こう」というテーマで。宇宙というテーマで「運動会、音楽遊び、かぐや姫、パラグライダー、縄跳びなど」をした。

日常の保育の中で、ムツレ教育の精神は伝えることができる。ゴミ拾いの習慣は身につけている。天候に左右されずに外で遊ぶ習慣が出来ている。自然の中では自然にごっこ遊びが始まる。特に指示もなく。

今、プログラムの年間計画の様式の見直しをしようとして検討している。昔の単元活動の時の様式のままであるので、指導案がある今、修正していく必要がある。30年前と同じではいけないだろう。

ムツレアレルギーは、サンタクロースに例えると小さいときに体験するとファンタジーは違和感のないものになるのではないかと。子どもの時に、カッパを聞くと自然に入ってくる。

以下は、日本野外生活協会の事務局長との面談記録。

日本のムツレ教育が始まって25年。3,257人がムツレ養成講座を受けてきた。ムツレ教育を受けた子どもは、調査中。新潟も市島とはほぼ同じ時期にムツレが始まった。新潟は、阿部恵子さんが事務局長。

以下は、協会会長、高見豊氏との面談記録。

リーダーの資質の向上は、大きな課題である。ステップアップ講座を開発中である。スウェーデンは、移民の教育が大きな課題で、ステップアップ講座の開発は遅れている。

視察日 3月9日(木曜日) 晴れのち曇り  
丹波市市島町 あいいくの丘こども園 3歳児  
クニユータナ 15人担任ひとり+主任

教室で、妖精ニッケさん(てんとうむし)からのお手紙の紹介

要旨「温かい春になってきたね。ワクワクするね。友達をたくさん見つけてね。

虫や草や花や見つかるかな。自然の中では

お約束を守ってね。」

「お約束覚えているかな。」(保育者と子どもたちが応答的に確認する)

- ・虫は卵の形にして捕まえる。つぶれないように。逃げないように。
- ・ゴミは虫が食べるとお腹が痛くなって、死んじゃうから、ゴミは持って帰る。
- ・草や花は根っこから抜かない。虫たちが食べるものがなくなってしまう。

パネルシアター「春の野山、土や草」

保育者「花は摘んでいいかな」

子ども「だめ、花がないと、虫が死んじゃう」

保育者「今日は、まだ少ししかないかもね。

そうしたら、見るだけにしておこうね。」

#### 筆者考察

保育者による指導ではなく、妖精による語りによって、子どもたちが自発的に行動を決めていく。絵本の語りから子どもが自分で感じたり考えたりして、行動化していくことと同じ構造である。3・4歳児が自分の中で感じたり考えたりしたことを言動にしていく。次の動きにも出てくるが、子どもたちは相互に行動を見合っ、してはいけないことがあれば注意しあう。

虫の命を大切に作る気持ちを育て、そのための行動の仕方(扱い方)を学んでいる。

目が出たばかりの植物にも自然保護の精神から大切に扱おうとする心を養っている。

#### 9:50 出発

- ・園庭で、チューリップの芽が出ているのを見つける。

園外に出る

- ・タンポポを見つける。

子ども「根っこから、とったらあかんで」

「取ったらあかんで」

- ・保育者「ニッケさんになって飛んでおいで(坂の上から呼んで、原っぱの坂道を登らせる)

- ・保育者「桜の芽が出ているね」と子どもに見せる。

- ・保育者が先導して、梅林に入る。子どもたちはタンポポのロゼッタを見つける。

- ・保育者が先導して、梅の花の匂いを嗅いでみる。

- ・栗の落ち葉のある場所で、踏んで音を楽しむ。手でつかんで上に向かって投げる。

- ・土手を登る。(意図的に運動能力を高めようと。4月は階段さえ登れない子が目立つ)

- ・子どもが2mm程度の小さな花を見つける(集中力と観察力)

- ・子どもが小さな赤い虫を見つける。(子どもが「ニッケさんの子どもかも」という)

- ・段差のコンクリートの細い段を歩く。一本橋を渡る雰囲気。落ちる子がいる。

#### 筆者考察

最近子どもたちの運動能力が低下しているとのことで、保育者は機会をとらえて運動能力の向上を図っている。土手を登ったり、細いところを歩いたり。

子どもたちが季節の変化や冬虫から春先の自然の様子を体験するように工夫している。

子どもが一生懸命に探そうと集中することを通して観察力が研ぎ澄まされていくことを実感する。

#### 10:30

- ・保育者「ニッケさんどこかな?」(ムッレハウスのある、いわくらハイキングコースの看板のある地域の方が整備している林に着く。)

- ・おやつタイム（おしぼりで手を拭き、酢硫酸のお茶を飲み、バナナを食べる）
- ・絵本タイム（「のはらにね」動物が春を見つける話。その間にニッケさんを隠す）
- ・ニッケさんはどこかな？（子どもが見つけるようにする）
- ・ニッケさん（保育者）「みんな、久しぶりだね。おおきくなったね。ご飯食べてる？」  
「冬の寒い中、土の中にいたよ。まえ、みんなで遊んだね」  
「木が切られて淋しかったけど、みんなに会えてよかった」  
「今日は、何か見つけた？」（たんぼぼ。葉っぱ、……）  
「もうすぐ、温かくなったら、お友だちがたくさん出てくるからね。」  
「また遊んでね。みんな、歌を歌おうか。」
- ・ニッケさんの歌
- ・ゲームをしようか。「風船ゲーム」で、ハチと風船に分かれて3回遊ぶ。
- ・風船になる人と蜂になる人に分かれる。
- ・風船が何の色になるか相談して、膨らんでいく。
- ・蜂がぶーんと飛んで、チクットさす。風船がバーンと割れる。
- ・ニッケさん「今日は、ゲームをして楽しかったね。やっぱり春っていいね」  
「草は根っこから取らなかった？ご褒美持ってきたよ。何が入っているかな。触ってみて。匂いがするかな。（おやつや）一つずつ取っていいよ。何かな、ニッケさんに聞いてみよう。バナナチップだよ。」  
「お友だちが呼んでいるから、もう行くよ。また会おうね。みんな今度は何組かな」  
「光組なら、ニッケさんのお友達に会えるよ。緑の服を着て、しっぽがあって、妖精

のムツレというよ。ばいばい。」

11:20

園に帰る。

#### 筆者考察

妖精のお話に耳を傾け、妖精とともに遊ぶことで、自然に親しみ、自然を大切に作る気持ちを育てている。

### Ⅲ 考察～成果と課題～

- 1 自然保育の取組は、その教育的意義や効果を期待して、森のようちえんなどの野外保育や一般園において多様な活動が行われているが、自然環境との共生さらにはESDや環境保護の教育を実践する保育の代表例の一つに「ムツレ教育」の実践がある。ここでは、動植物の生態や環境の循環性の理解に基づく環境配慮の知識と行動を身につける教育が行われている。
- 2 環境教育としての「ムツレの教育」については、特に、カリキュラムや教育方法のあり方など、更に詳細に検討する余地がないだろうか。例えば、ムツレ教育の実践「ねじりパン」の食育が行われるが、日本の米・味噌などの調理がより好ましいのではないか。また、妖精ムツレが登場して子どもたちに環境保護の大切さを語るのであるが、森のようちえんなどの保育実践者の中には「なんとなく違和感がある」という声もある。新しい文化を受け入れるときには違和感は初めはあるのが当然である。ムツレ教室が日本に導入されて25年が経つが、スウェーデンやフィンランドその他の国と比べ、それほどの広まりが多くはないという事実、養成講座は受けてもムツレ教室を標榜することはない保育者・園もあることの実事など、日本における今後の

ムッレ教室の発展のための課題として受け止めたい。

- 3 「ムッレの教育」だけでなく、幼児の環境教育の保育者養成について、スウェーデンなど国外の養成・研修内容や課題を今後検討したい。ノルウェーの自然系・専攻の保育者養成についても検討したい。

## おわりに

自然享受権が保障されることで自然の豊かさ、すなわち多様性を体験でき、その多様性の体験から循環性を理解できるという流れがある。自然を享受できるからこそ、その自然を大切にしようと保護する言動が生まれて来る。

実践にも見られたように、3歳児から子どもたちは「ゴミ」を捨てることが動植物の生態を破壊し、循環する自然を傷つけることを知っており、妖精との約束を守って行動する。北欧の保育文化のなかで生まれたムッレ教室が日本の保育文化の中に溶け込むために何が必要なのか、また何が障害となるのか、今後さらに検討していきたい。21世紀の大きな課題にESDがある。ムッレ教室はこれに大きく貢献するものである。日本の既存の保育にない教育方法として、今後の広がりが注目される。

## 引用・参考文献

- 1) ステイナー・ヨハンセン著、クリスティーン・高見訳、高見幸子監修、『自然の循環』、日本野外生活推進協会、2002年。
- 2) ステイナー・ヨハンセン著、高見幸子訳・監修、『自然の中へ出かけよう』、日本野外生活推進協会、1997年。
- 3) ムッレボーイ野外保育園、ナチュラル・ステップ著、クリスティーン・高見訳、高見幸子・高見豊・足立邦明・西鉢通子監修、『子どもたちのコンパス』、日本野外生活推進協会、2004年。
- 4) 岡部 翠編著、『幼児のための環境教育』、新評論、2007年。
- 5) ヨスタ・フロム著、高見幸子訳、佐伯美保監修、『スウェーデンの「森のムッレ」対象年齢別事例集～子どもたちを自然の中へ～』、環境ネットワーク「虹」、2014年。
- 6) 豊泉尚美・森下英美子著、『地球市民を育てる～子どもと自然をむすぶ～』、圭文社、2016年。
- 7) 杉山浩之、「幼小の連携と接続」、『広島文教女子大学紀要』第44巻、2010年。
- 8) 杉山浩之、「環境教育におけるカリキュラム・マネジメントの考察～地域資源を活用した「生活教育型実践」の保幼小連携構想～」、『広島文教教育』、広島文教女子大学広島文教教育学会、2017。
- 9) 井上美智子、『幼児の環境教育』、昭和堂、2012年。
- 10) 平山許江、『領域研究の現在＜環境＞』（幼児教育知の探究17）萌文書林、2013年。
- 11) 岩田好宏、『環境教育とは何か』、緑風出版、2013年。
- 12) 佐藤朝代編著、『生きる力を育む自然の教育』、ひとなる書房、2013年。

## 資料

- ・クニニュータナ教室（対象2～4歳児：ファンタジーと現実が同居し、二つを分けて考えることができず、自分の周りのすべてが生きていて意思があり、感覚をもっていると思っている。） 1～1.5時間 8～12人
  - ◎リーダーと一緒に発見し、子どもに探険させ、体験させるだけで充分である。
  - ・ムッレ教室（対象5～6歳児：ファンタジーと現実を区別できる。ファンタジーが遊びの一部となり、森の幼生というファンタジーが5～6歳児に適したものとなる。） 2時間 12～15人  
自然の中では様々な予想外のことが起きるので、予定のプランは状況に応じて柔軟に変更する（蟻塚に蟻を見に行くプランが、雨でたくさんのミミズが出て来ているのを見つける場合など）
  - ◎子どもは実験をして、知識を得ようとする。
- 以上